

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報 *sokyu* 蒼穹

2013.9 Vol.112



特集1 新県立大学を考える P.02

**特集2 平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」
大学COC事業に採択** P.04

- 松本大学が取り組む“まちづくり” P.06
- グレードアップをめざして! — 松大健康教室開催 — P.08
- 地域に有為な人材の育成をめざして — 高大連携事業 — P.09
- 魅力ある地域づくりへの貢献をめざして、新たに連携協定締結 P.10
- 松本大学の国際交流 P.11
- 東日本大震災災害支援プロジェクト3年目の活動 P.13 ほか

新県立大学を考える

先ごろ長野県の阿部守一知事より「新県立大学基本構想」が発表されましたが、その内容は長野県内私立大学や県経営者協会、各私立大学の地元自治体等より既存の県内私立大学との競合を避け、長野県内に未整備で現代ニーズの高い学部・学科構成の設置を要望してきたにもかかわらず、これに反するものでした。この構想のままに設立されることは、私立大学の経営を圧迫し、ひいては県内高等教育全体の活力の低下を招くものと危惧しています。そこで将来の長野県高等教育を振興するような「新県立大学」とはどのようなものか考えます。

新県立大学、ここが鍵では？

新県立大学設立構想が、こんなにも混迷する根本的理由はどこにあるのでしょうか。

広い長野県にあって、「東信、北信、中信、南信の各地域が、産官民とそこに存在する大学が協力し、各地域の持続的発展や活性化が図れている状態をどうすれば実現できるか」という視点を中心に据えて考えてみます。

松本大学長 住吉 廣行

県内大学の地域への配置状況

長野県を見渡すと、①東信では上田市に長野大、信州大繊維学部があり、両大学とも日経グローバル誌における、地域貢献度ランキングで常連の上位校です。さらに佐久市に佐久大があり、東信にはこの3大学と短大が2校あります(以下図1参照)。②北信には長野市に清泉女学院大と信州大の工、教育学部があるほか、短大が3校と高専もあります。③中信には松本大、松本歯科大、信州大医、理、人文、経済学部があります。ここでも信州大と松本大は地域貢献度ランキングの上位校であり、最近のCOCにも採択された筋金入りの地域密着型の大学です。この他に短大も2校あります。④南信においては、茅野市に諏訪東京理科大、駒ヶ根市に県立看護大、南箕輪村に信州大農学部があります。諏訪東京理科大もCOCでは採択には至りませんでした。一次審査に通過するなど健闘しています。この他に短大も2校、辰野と飯田にあります。

大学は若者の集まるどころ

大学は向学心に溢れ、活力ある若者が多く集まる場です。若者がいるだけで、その地域の将来への明るい展望を想像出来ます。逆に高齢化が進んでしまった地域では、限界集落という言葉もあるように、将来ビジョンを語ることもさえない状況です。

こう考えると、地域社会が大学を教育機関としてだけでなく、地域の活性化を担う中心的な機能と位置づけても不思議ではありません。諏訪東京理科大や松本大の設立時に、長野県や両大学が立地する市や広域連合が多額を出資しましたが、背景にはこうした事情があると思われます。地方自治体はこれからの少子高齢化時代を見

据え、大学と協力することでその先の展望を切り開こうとしているとも言えます。

小規模私大の定員充足と地域活性化

それでは今、県として考えるべきことは何なのか?各地域毎に、意図した地域と大学とのコラボレーションが上手く機能しているかどうかを見守り、チェックすることではないでしょうか。長野大や信州大繊維学部、佐久大が元気なので上田市・佐久市周辺に活力がある。諏訪東京理科大の存在で、茅野市を始め諏訪地域に活力が溢れている。県立看護大や信州大農学部が駒ヶ根市や南箕輪村だけではなく伊那・飯田方面にも影響を及ぼして元気である。松本市周辺も、学生・教職員が確かに地域を活性化している。こうなれば、県としても十分に満足できる状況であると思います。

このとき、影を落とすのは全国的に見ても明らかのように、地方の小規模私立大学の多くが定員を割っていることです。残念なことに長野県も例外ではなく、佐久大と松本大を除く4つの私学は定員を充足できていません。そこで、県下の各地域の活性化を基盤に、長野県全体の活性化を願う長野県としては、何とかこれらの大学が定員を充足して、元気にその役割を果たしてもらえようにすることが大きな仕事であろうと考えます。

私大の独自性と県の高等教育政策

そうはいつても私学はそれぞれに建学の精神があり、そのミッションに基づき独自の教育活動を行っています。従って、大学を元気にし、学生募集を順調に進める第一義的責任は、当然各私大の奮闘にかかっています。そうであれば、県ができる支援は直接乗り出して云々ではなく、県版のCOC制度を創設して私大を叱咤激励すると共に大いにエンカレッジもする、県下高校と連携して県内私学への進学を勧める、県内企業と連携して卒業後の就職先を保証していく等、様々な間接的な方法が考えられます。これこそが県が独自の高等教育政策を持つという意味ではないでしょうか。

県がしてはいけないこと

こう考えると、これだけはしてはいけないことが浮かび上がってきます。それは頑張っ、元気でいる既存の大学を弱体化させてしまうことです。論をここまで進めると、賢明な読者はすでにお気づきのよう、今回の長野県の新県立大学設立構想は、周囲の4私学から歓迎されていないどころか反対されています。自分たちが運営する大学の学部や学科と重複している部分が多く、少子化の進行の中で弱体化を招くという理由です。明らかにこれは、してはいけないことの部類です。

長野県全体で見ると学部構成で不足しているのはどの分野か、その分野はどの地域に設立するのがベストか、そもそも自治体や企業、進学する高校生が希望する分野は何か、こういうことを吟味する必要があります。そのために県が音頭を取り、私学を含めた関係者が集まり率直に実情を出し合いながら総合的な高等教育政策へと昇華させていく必要があります。もちろんこの

新県立大学基本構想と県内私立大学の教育内容で競合する学部・学科			
新県立大学基本構想	松本大学	長野大学	諏訪東京理科大学
<ul style="list-style-type: none"> 総合マネジメント学部 総合マネジメント学科 グローバルビジネスコース 公共経営コース 	<ul style="list-style-type: none"> 総合経営学部 総合経営学科 観光ホスピタリティ学科 	<ul style="list-style-type: none"> 企業情報学部 企業情報学科 環境ツーリズム学部 環境ツーリズム学科 	<ul style="list-style-type: none"> 経営情報学部 経営情報学科
新県立大学基本構想	松本大学		
<ul style="list-style-type: none"> 健康発達学部・健康文化学科 食健康コース (管理栄養士養成課程) 	<ul style="list-style-type: none"> 人間健康学部・健康栄養学科 (管理栄養士養成課程) 		

少子化時代に多額の税金を大学設立に注ぎ込むことを、県民に認めていただけることが前提になります。

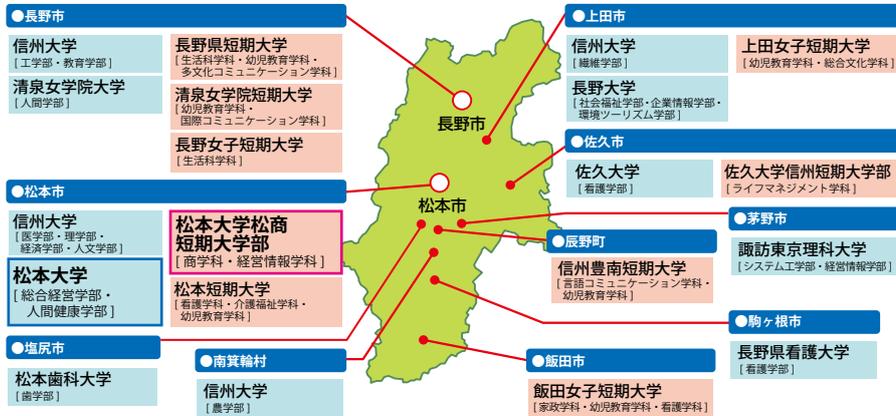
大局的観点から見直しを求める

私自身は以上のような視点から、今回長

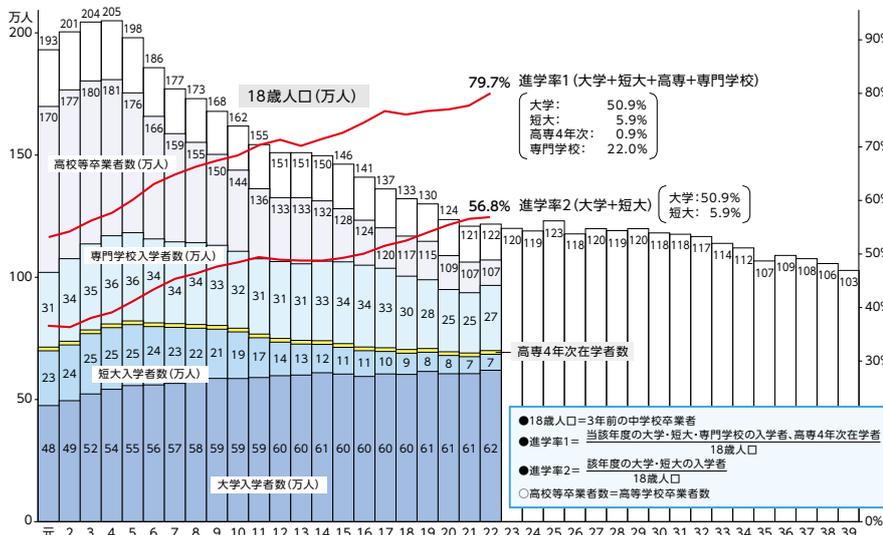
野県が提示している構想は抜本的に見直すべきだと考えています。それは各私学の経営を苦境に追い込むという、典型的な「官」が「民」を圧迫する構造になっているという事だけでなく、それ以上に、長野県の高等教育政策として練り上げ、誰もが納得

できる優れた内容になっていないからという面がより大きいからです。もっと広く叡智を結集すれば、これからの長野県の行く末を切り開き、地域活性化への礎となる方向が必ず見出せると思います。

図1 長野県内の大学・短期大学の分布



18歳人口と進学率等の推移 (横軸は平成年度)



長野県の18歳人口の推移 (横軸は平成年度)



県立大学問題の今日までの経緯

- 平成4年3月 長野県短期大学同窓会の「六鈴会」が県議会県短期大学の4年制化を請願し採択される。
- 平成13年3月 再び同趣旨の請願が採択される。しかし、この間古村、田中知事は県短期大学の4年制化を決断しなかった。
- 村井前長野県知事が任期最後に県短期大学の4年制化検討の方針を打ち出す。
- 平成22年2月から平成23年7月 現阿部知事のもとで8回にわたり「長野県短期大学の将来構想に関する検討委員会」が行われる。
- 平成22年9月21日 阿部知事に及び県会議長・副議長、県会各派に対し、県経営者協会、長野大学、松本大学、清泉女学院大学より要望書提出。
内容/この時期に大学を作るべきではない。仮に作る場合は県内私学を圧迫するような内容とするべきではない。県組織の中に県内高等教育振興を担当する部局を設置すべきである。
- 平成24年5月から平成25年6月 6回にわたり「県立大学設立準備委員会」が行われる。(私大関係者は入らず)
- 平成24年6月11日 阿部知事に対し、長野大学・諏訪東京理科大学・松本大学・清泉女学院大学より要望書提出
内容/県立大学は県内私大と競合を避け、現代ニーズの高い学部・学科構成とし、入学定員も適正規模にすべきである。

- 平成24年9月 県議会において阿部知事より基本構想の素案が発表される。
総合マネジメント学部 総合マネジメント学科(入学定員 200名)
こども学科 (入学定員 40名)
※この時点では阿部知事は「管理栄養士の課程は必要性が低い」と説明
- 平成25年5月30日 学校法人松高学園理事会において、「長野県立大学に管理栄養士養成課程を設置することに絶対反対決議」を行う。
- 平成25年6月19日 最後の県立大学設立準備会議が開かれ、基本構想案に対し複数の委員が疑問を示したのが、座長の和田副知事が原案どおりとまとめる。
- 平成25年6月11日 阿部知事に対し、長野大学・諏訪東京理科大学・松本大学・清泉女学院大学より要望書提出
内容/県立大学は県内私大と競合を避け、現代ニーズの高い学部・学科構成とし、入学定員も適正規模にすべきである。

県内大学で学べる学問系統 (旺文社17系統70分野分類において、独自の基準による)

学部系統	学問分野	信州大	長野県看護大	県内私立大
文学部系統	文学分野	●	●	●
	史学・地理学分野	●	●	●
	哲学分野	●	●	●
	心理学分野	●	●	●
外国語学部系統	語学分野	●	●	●
人文・教養・人間科学部系統	文化学分野	●	●	●
	教養学分野	●	●	●
	総合科学分野	●	●	●
	人間科学分野/人文系その他	●	●	●
教育・教員養成系学部系統	教育学分野	●	●	●
	小学校・幼稚園課程	●	●	●
	中学校課程	●	●	●
	特別支援教育課程	●	●	●
法学部系統	法学分野	●	●	●
	政治学分野	●	●	●
経済・経営・商学部系統	経済学分野	●	●	●
	経営学/経営情報学/商学/会計学	●	●	●
社会・社会福祉学部系統	社会学/観光学/メディア学	●	●	●
	福祉学	●	●	●
国際関係学部系統	国際関係学/国際文化学	●	●	●
理学部系統	数学・情報科学分野	●	●	●
	物理学分野	●	●	●
	化学分野	●	●	●
	生物学・生命科学分野	●	●	●
工学部系統	機械工学分野	●	●	●
	電気・電子工学分野	●	●	●
	情報学分野	●	●	●
	土木工学分野	●	●	●
	建築学分野	●	●	●
	原子力工学分野	●	●	●
	応用物理学分野	●	●	●
	応用化学分野	●	●	●
	生物工学分野	●	●	●
	資源工学分野	●	●	●
	材料工学分野	●	●	●
	航空・宇宙工学分野	●	●	●
農・獣医畜産・水産学部系統	農学分野	●	●	●
	農芸化学分野	●	●	●
	農業工学分野	●	●	●
	農業経済学	●	●	●
	森林科学分野	●	●	●
	獣医学分野	●	●	●
	畜産学・動物学	●	●	●
	水産学	●	●	●
	生物生産・生物資源学	●	●	●
	医学部系統	医学分野	●	●
歯学部系統	歯学	●	●	●
薬学部系統	薬学	●	●	●
看護・医療・栄養学部系統	看護学	●	●	●
	医療・保健学	●	●	●
	栄養学	●	●	●
	家政・生活科学	●	●	●
家政・生活科学部系統	家政学	●	●	●
	生活科学	●	●	●
	児童学・子ども学	●	●	●
	児童学・子ども学	●	●	●
体育・健康科学部系統	体育・健康科学	●	●	●
芸術学部系統	美術	●	●	●
	デザイン	●	●	●
	工芸	●	●	●
	音楽	●	●	●

- 平成25年7月3日 松本広域連合、松本広域連合議会、松本周辺選出県議会議員有志より県知事、県議会議長に対し、それぞれ「地元私立大学を圧迫する基本構想を見直すよう」要望書が提出される。
- 平成25年8月5日 「新県立大学構想の見直しを求める会」が発足し、署名活動に入る。
- 平成25年8月12日 松本市、塩尻市、安曇野市の3市市議会より県知事、県議会議長に対し県立大学構想の進め方について慎重な対応を求め署名を提出。
- 平成25年9月24日 「新県立大学構想の見直しを求める会」より基本構想の再検討を求め陳情書及び請願書を県知事、県議会議長宛に賛同者の署名を添えて提出。

署名数 知事宛96,025名、議長宛96,104名

※署名活動にご協力いただきました皆様へ
この度の「新県立大学基本構想の見直しを求める」署名活動につきましてはご協力いただきありがとうございました。お陰様で9月24日現在上記の署名が集まりました。なお、この署名活動につきましては平成25年12月まで継続して参りますので引き続きご協力をお願い申し上げます。

平成25年度 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」 大学COC事業に採択

地域連携戦略委員会委員長・総合経営学部学部長 木村 晴壽

今年度、文部科学省が大学改革の目玉として打ち出した「地(知)の拠点」(Center of Community=COC)整備事業に、本学が申請した「地域の新たな地平を拓く牽引力、松本大学」が採択されました。これまでのGPと比べれば格段に高額な補助金額(最大5年間で約3億円)ということもあり342の大学・短大等が応募し、採択されたのは52大学(短大3を含む)でした。私立大学は180大学が応募したにもかかわらず、わずか15件の採択で、一方22の国立大学、14の公立大学が選ばれ、国公立に偏った結果となりました。

I. COC整備事業の背景

1. 文部科学省の姿勢

文部科学省が大学設置基準を大綱化したのは今から30年近くも前、本格的な大学改革に乗り出してから、すでに10年以上が経過しました。その過程で大学改革は、全国の大学の目の前に、競争的補助金というかたちで現れてきました。社会の発展に寄与する研究・教育活動をしている大学に優先的に配分する、との姿勢を文部科学省が鮮明にし始めたのであり、各大学、特に小規模私大には大きな影響を与えつつあります。あるいは、重要かつ深刻な問題を投げかけている、と言い換えていいかもしれません。

こうした動きの背景には、自由な研究・教育活動が大学で展開することに問題はないとしても、アカデミズムが免罪符になって教育を軽視しているのではないか、という大学に対する厳しい視線があったことは否定できません。少子化による大学の破綻が現実味を帯びるなか、大学の立て直しのためにも当初は、教育機能の強化が声高に叫ばれましたが、近年はそれに加えて大学の社会貢献が強調され始めています。つまり、社会発展に貢献する大学づくりが求められているのです。日本の経済状況が長期にわたって低迷し、したがって厳しさを増すばかりの国家財政の状況がそのような動きに拍車をかけたことも間違いのないでしょう。

今回のCOC事業には、社会の役に立つてこそその大学であり、大学は地域社会の知の拠点になるべきである、という考え方がはっきり表れています。文部科学省は、現代の大学には「国民や社会の期待に応える大学改革を主体的に実行することが求められている」と明確に述べ、従来の大学は社会の要請に応じてきたのか、という大きな疑問を投げかけています。そのうえで、これからの大学は、はっきりと目に見えるかたちで

地域社会の振興に貢献するべきであるとして、全国の大学に地域志向を求める方向へと大きく舵を切ったことは明らかです。

これまで文部科学省は大学改革の柱として、いわゆるGP事業(様々な分野でGOOD PRACTICE……グッドプラクティス……を積極的に実行している大学に優先的に補助金を配分する事業)を実施してきましたが、それらは、研究であれ教育であれ社会貢献であれ、それぞれの大学がその方向性を明確にし、それぞれの分野で意味のある活動をすれば評価される仕組みでした。しかし、今回のCOC事業は、唯一、地域志向の大学づくりを求め、その補助金額もこれまでのGPとは比較にならないほどの高額に設定されています。

文部科学省は、大学たるもの社会に貢献せよ、各大学が立地する地域が困難を抱えているのだから、その地域社会を目に見えるかたちで支えよ、と旗を振っているように見えます。COC事業はその宣言と言ってもいいでしょう。

2. 選定結果が示すもの

以上のような背景のもと、文部科学省がCOC事業で具体的に何を求めたかは、同省が発した次の文章で明確になっています。すなわち、「自治体等と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、学内組織が有機的に連携し、『地域のための大学』として全学的に地域再生・活性化に取り組み、教育カリキュラム・教育組織の改革につなげる」ことを求めたのです。まるで松本大学の設立趣意書がそっくりそのまま書かれたかのようなこの文章に、我々はむしろ戸惑いさを感じたほどでした。

最終的に今回のCOC整備事業では、私立大学15に対して国立大学22・公立大学14という選定結果となったため、「COC事業はもともと地方の小規模大学を選定す

るのが筋であり、地域志向を冷笑してきた多くの国立大学、特にマンモス国立大学が採択されたのは不可解だ」という批判も耳にします。しかし、当初のいわゆるグバ評とは違うこの結果には、多くの大学が想像する以上に重要な方向性が暗示されている、と私には思えます。とりわけ、京都大学を筆頭に多くの国立大学が採択されたことは、もちろんそれぞれの申請書に十分な説得力があったからでもあるのですが、国立大学でさえ地域を念頭に置いた教育・研究を目指している、京都大学でさえそうなのだ、と地域社会から遊離している大学への警鐘を鳴らす、そのような役割を、結果的には果たしているように見えます。

II. 松本大学の考え方

1. 地域課題についての考えかた

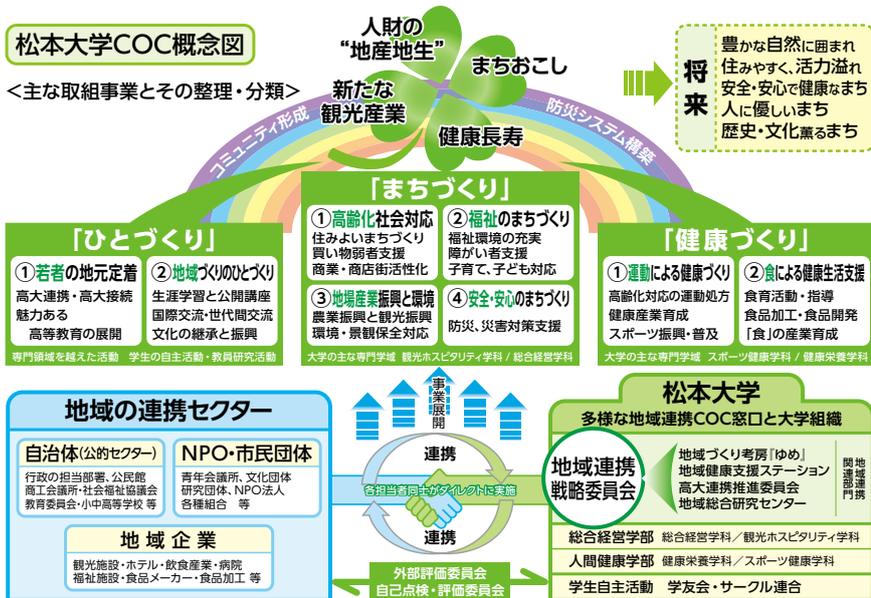
今回のCOC選定に際し文部科学省は、

- ①それぞれの大学が考える「地域」とはどこのことか、
- ②その地域社会が抱える地域課題は何か、
- ③それぞれの大学は、その課題にどのように対処しようとしているのか、

を明確に述べるように求めました。この点について本学は、「現代の地域社会が抱える課題は、風土に由来する一部の健康・医療問題や政治経済の問題を除けば、全国共通である場合が多く、地域による差異は小さい。その意味で、地域ごとの特徴や個性は、地域課題そのものではなく、むしろそれら課題へのアプローチや解決の仕方こそ見出されるべきである」との根本的認識に立ち、地域課題を本気で解決しようとするならば、もはや、地域社会の総力を結集した体制を構築して問題に向かう他はない、という考え方を提示しました。

2. 幅広い人材養成

このような考え方からすれば、地域貢献を追求する松本大学には、若者を対象にした人材養成はもとより、地域社会の幅広い層と数多くの集団を受け入れて、地域づくりに貢献できる人材を養成することが求められていることとなります。中長期的には、地域社会全体を対象とした、いわば全地域的な人材育成を見通した大学づくりが必要なのです。



はおおよそ考え難いのですが、それでも地域社会を支える地域独自の経済循環を創出する必要は確かにあります。いわゆるコミュニティビジネスの問題です。

地域の経済・ビジネスが実態としてどのようなになっているのかを、数量的にも構造的にも明確に把握したうえで、「6次産業」をはじめとした新たな視点と発想にもとづくビジネスとその担い手を育成することは、実は地域が独自性を発揮するための喫緊の課題でもあります。既存の仕組みでなく、企業や企業人任せでもない、地域に視点を据えたビジネスの創出と言ってもよいでしょう。地域づくりに関わる人材養成に、さらに加えるべき重要な側面ではないでしょうか。

3. 地域の力を結集する必要性

では、解決すべき地域課題は何なのか。この厳しく鋭い設問に対し本学は、現在考え得るおおよすべの社会問題が実は地域課題でもある、という答えを出しました。しかもそれら地域課題は多岐にわたっていると同時に、相互に関連しているケースがほとんどで、個人や個別グループによる分散的活動では到底解決できないところまできています。関係諸団体が連携しそれなりの規模で対処する必要もあるし、また、個別の単発的な活動でなく、ある程度の展望を持った中長期的な活動を継続することで、出口が見えてくるような事柄も多いのです。

地域社会の土台となる経済基盤をがっちりと構築し、住民がいきいきと暮らし、行政がそれらを強力にサポートする、そのような地域社会につながる力を、住民からも企業からも、またNPOからも確実に引き出し、その橋渡しをする存在なくして、地域の総力を結集することはできないはず。そうである以上、**本学は、地域の結節点としての役割を果たすべきであるし、人材養成を軸に、地域に散在する活力のベクトルを揃えて地域再生に向かう態勢づくりの拠点になるべきではないか、という地方大学としてのひとつのあり方を提示しました。**

III. 本学の主な方策

そのために本学はこれから具体的に何をやるのか、これが次の問題です。以下はその要約です。

1. 人材育成機能拡充のための計画

1) PBL型科目の新設

人材育成の対象を若者に限定せず、地域

社会を構成する様々な団体や個人へ拡げるため本学は、個別の地域課題そのものを主題とした科目を新たに設け、本学学生はもとより、地域の企業人・行政マン・住民等を受け入れる計画を立てています。

具体的にはまず、「買い物弱者問題」をテーマとする通年科目を新設し、問題の背景理解、実態調査にもとづく問題把握、採られるべき方策の検討、モデルの設定、課題解決に向けた実践とその検証、という一連の過程をあらゆる角度から学習・研究する科目を始動させる、というものです。次いで、「健康づくり」「防災対策」「環境・景観保全」(以上は候補)といった地域課題に特化した科目を順次加える予定でもあります。

これらの新設科目は、単に地域全体として課題に対応するためのレベルアップをはかるだけでなく、学習の過程それ自体が地域の力を結集するための重要な方策ともなっています。何故ならば、腰を据えてじっくり特定の地域課題について学ぶことで、漠然とした課題認識が、極めて鮮明かつ現実的な問題把握へ転換するからです。それは、それぞれの立場で課題解決への道筋を描ける人材養成にもなり、まさに本学の教育手法の基軸でもあります。

2) 地域住民対象の「コミュニティ・ビジネス・イノベーター」(仮称)養成講座の新設

すでに実施されている「地域づくりコーディネーター」講座に加え、やはり地域住民を対象とした「コミュニティ・ビジネス・イノベーター」(仮称)養成講座を新たに設置することを計画しています。経済基盤を確保することが地域づくりの大前提であることを強く意識した講座です。現代の日本では、狭い地域社会で完結する経済やビジネス

2. 学内COC機能を

新「地域連携戦略委員会」に統合

地域貢献・地域密着をスローガンとして発足した本学はこれまで、地域づくりに貢献しうる若者の養成はもちろん、地域の活性化につながる活動をあらゆる角度から実践してきました。それらを実行・推進する部署として、地域連携戦略委員会・高大連携推進委員会・地域総合研究センター・地域づくり考房「ゆめ」・地域健康支援ステーション、の5機関を設けていますが、それぞれの委員会・部署は任務に応じて異なる位置づけとなっています。

具体的には、地域総合研究センターは研究部門に、高大連携推進委員会は教育部門に、地域づくり考房「ゆめ」と地域健康支援ステーションは学生支援部門に、そして学生の地域活動を就職へつなげる目的を持って発足した地域連携戦略委員会はキャリア部門に位置づけられています。そのため結果的に、地域との関係で言えば、大学全体としてどのようなになっているのかを把握し難くなっているか、正課教育としての授業科目で行われていることも含めれば、さらに全貌はつかみ難くなっているか、という反省があります。

こうした状況を解消し、大学としてより効率的にCOC機能を発揮できるよう、学内の体制を整備しようというのが、新「地域連携戦略委員会」です。具体的には、本学のCOC機能はすべて新「地域連携戦略委員会」に統合し、窓口を一本化する。そのうえで、この新「地域連携戦略委員会」による統括のもとで、従来の5つの機能がさらに効果的に発揮されるようにするための、いわば機構改革です。

松本大学が取り組む“まちづくり”

前ページの特集「大学COC事業に選定」からも分かるように、『地域志向の大学づくり』が求められる中、本学では『地域貢献』を基本理念に掲げ、地域づくりに貢献しうる若者の養成はもちろん、地域の活性化につながる活動を実践しています。

ここではその具体例として、総合経営学部観光ホスピタリティ学科の白戸ゼミの松本市上土商店街での取り組みをご紹介します。

継続が信頼を築き、上土商店街を元気に!

総合経営学部観光ホスピタリティ学科長 白戸 洋

かつての商都松本を代表する 商業街・映画の街 — 上土

上土商店街は、「えびす講には、上土に布団を買って行ったものだ」と年配の方がよく話してくれるほど、市民から親しまれてきた商都松本を代表する商業街であり、同時に、古くから映画の街としても親しまれていました。映画を観る前に食事を摂ったり、映画の後にカフェでお茶を楽しむお客さんが多かったこともあり、洒落た洋食屋や喫茶店が軒を連ね、夜遅くまで賑わっていたといいます。しかし、消費者意識の変化や商圈の広域化、モータリゼーションなどを背景として、徐々に商店街からは客足が遠のき、いくつもあった映画館もすべて閉館。それでも商店街の人たちは、かつての面影を残す町並みや建造物を守り、「大正ロマンの街」を合言葉に様々な街づくりに取り組んできました。

上土商店街と学生との出会い

上土商店街と本学の学生との出会いは8年前(平成17年)の夏、松本市街地の街づくりをテーマにした総合経営学部のアウトキャンパス・スタディで上土商店街を訪れた時にさかのぼります。その時伺った商店街振興組合女性部長の増田志津子さんのまちづくりへの想いに多くの学生が感動したことが後の活動のきっかけとなりました。

本格的にまちづくりに関わるようになったのは平成19年から。その頃松本では、県内外の大学生が、まちづくりをテーマに調査したり、実際にイベントを行なうこともあり、その中には生意気な事を言うだけ言って、そのうちいなくなってしまうような学生もいた事から、当初街の人たちは学生をあまり信用していませんでした。

そこで2期生から引き継いだ4期生の学

生達は、まず地域の人と仲良くなって信用してもらうことから始めようと考えました。彼らは、商店街で実施されるまちの清掃と花植えをおこなう「クリーングリーン運動」へ参加。学生が一番苦手なことをやれば、街の人たちは自分たちが本気だということを知ってもらえるに違いないと考えたからです。さらに、つながりを深めるために、女性部のメンバー(最年長が80歳を過ぎていた)と「合コン」を行い、交流が深まりました。その後は、松本市民祭やえびす講などの商店街が参加するイベントやお祭りを手伝ったり、学生が考案した食品を販売したりすることを通じて徐々に街に溶け込んでいったのです。

継続的に取り組む “まちづくり”の活動

具体的なまちづくりの活動として最初に取り組んだのは、平成20年に行った「レトロラリー」というイベントからです。主として子どもとその親を対象に、上土に残る大正や昭和初期の建造物や路地、湧水などを巡って街の魅力に触れようというものでした。ラリーではチェックポイントを設け、人力車乗車体験や水鉄砲による射的、昔の遊びコーナーなど子どもたちが楽しむ仕掛けを用意。さらにいくつかのお店を巡ってのスタンプラリーも行いました。普段、なかなか店に入りづらいという若いお母さんたちには、上土の店を知っていただく良い機会となりました。

平成22年からは、6期生の学生が上土に老舗の菓子店が多いことに注目し、菓子店をスタンプラリー形式で巡る「スイーツラリー」が始まりました。最初は尻込みする店舗もあったものの、学生たちの熱意が動かし、平成22年の10月に8店舗が参加して開催。参加者は15組と少なく、学生にとって



は不満の残る結果でしたが、それをきっかけにその年のえびす講で商店街の若手がスイーツのセットを販売したところ大好評。翌年の平成23年のえびす講からは、上土に加えて緑町、大名町、縄手など松本城周辺地域の店を巻き込み、36店舗が参加する「松本城下町スイーツラリー」へと発展しました。学生がお店に直接出向いて取材したマップをもとに、チケットを持って店を巡り好みのスイーツを買って求めるこのイベントは、平成23年度には300組、平成24年度には400組が参加し、街の行事として定着しています。とかく商店街のイベントは各店舗の商売に結びつきにくい傾向がありますが、「スイーツラリー」は店の商品を資源として活用した画期的なイベントとして評価されています。

6期生が始めた「スイーツラリー」を手伝っていた8期生は、その取り組みを継承するとともに、その活動の中から街の中に多様な人たちが交流できるような場を作り



スイーツラリー参加店舗への取材とマップ作り



たいと考え、「まちカフェ・プロジェクト」を平成24年度から開始しました。これは、松本駅アルプス口付近でリヤカーによる野菜の引き売りを行っていた彼らが、高齢者が人と話したり、買い物を楽しむ場を求めていることに気づき、そのような場として商店街を再生できないか考えたからです。

彼らの思いは、平成24年12月に「第1回カフェ上土日」として具体化し、お茶を飲みながらゆっくりできるカフェに加え、街全体を舞台にした様々なイベントを行ないました。子ども向けには、リヤカーをそりに見立てサンタクロースやトナカイの扮装をした学生がまちを練り歩き、出会った子どもとじゃんけんをして、勝ったら飴をプレゼントする「お菓子なサンタさん」、けん玉やメンコで遊ぶ「キッズコーナー」、学生によるミニライブや母親向けのリース作り体験など、大人も子どもも楽しめるイベントを用意し、50名を超えるお客さんに来て頂きました。



お菓子なサンタさん

さらに平成25年2月には、高齢者を意識して孫やおじいちゃんにプレゼントするバレンタインのチョコレート作り体験などを内容とした「第2回カフェ上土日」も開催しました。

平成25年度も10期生によって、年間6回



お茶を飲みながら交流できるカフェ

のカフェ上土日とを計画。5月にはこどもの日にちなんだ駄菓子子の販売。7月には松本地方で飾られる押絵雑の展示や、前年閉店したスギヤのアイスシャーベットの複製配布。9月には敬老の日をコンセプトに地域の高齢者を対象としたネイルやWii体験、子どもを対象とした肩たたき券などのオリジナル券づくりといったイベントを行ないました。



学生に刺激されて始まった “まちづくり”への取り組み

地味ではあるが地道にまちづくりに溶け込んできた学生達は、当初は距離感を測りあぐねていた地域の方々に、今ではすっかり信用して頂いています。時には優しく、しかし時には厳しく接して頂く街の姿は、まるで自分の孫に対するようだと感じることも。地域の人たちに必要とされ、期待されている学生たちは、その期待に応えようとさらに頑張っています。

一方で、高齢化が進む商店街でも学生に刺激されてまちづくりへの取り組みが始まっています。かつて街のシンボルだった松本電気館という映画館を修復し、街のランドマークにして回遊性のまちにしようとして今年から学習会を開始。8月には学生とともに、映画館を再生したまちづくりに取り組む上越市高田に視察に出かけるなど、先を見据えたまちづくりが始まっています。



上越市高田への視察

上土町の みなさんから

10年以上にわたり上土商店街と松本大学の学生さんとの交流にご尽力いただいた白戸ゼミのみなさんに対しては、上土町会としても深く感謝する次第です。

当町会も、例外ではなく超高齢が進み、若者の声が非常に少なくなっている時代に、白戸ゼミの学生さん達が積極的に「街づくり」へ参加していただき、上土町のイメージアップが図れたことは、この上ない喜びであります。

しかしながら、超高齢化に対しては、町のあり方を大きく変えなければ、課題解決には結びつきません。今後益々、白戸先生はじめ学生さん方のエネルギーは上土町にとって不可欠でありますので、引き続きさらなる交流をお願いしたいと思います。

上土町会長 鈴木 秀三郎

松本大学の白戸ゼミの学生さんとの今までの関わりをもとに、様々な新しい試みをこれからも続けていきたいと思えます。

上土商店街振興組合理事長 橋倉 直樹

白戸ゼミの皆さんが、上土の街に関わって下さるようになってから、街が明るくなって来ました。というより街の人同志の繋がりが明るく、そして温かくなってきたような気がいたします。高齢化の進んだこの商店街で、大学生の皆さんと交流が出来るなどということは、考えもしない事でした。真剣に上土の事を考えて下さり、共に行動して行くことで、子供とも孫とも違う関わり合い、実の子供ともできないふれあいが出来ました。そして学生の皆さんがパイプ役となって、街の中に溶け込んで行く姿を見る度に、街が、人が徐々に変わって行くのを感じることができ、うれしく思います。ありがとうございます。

上土商店街振興組女性部長 増田 志津子



グレードアップをめざして!

— 松大健康教室の開催 —

人間健康学部健康栄養学科長 廣田 直子



養と運動をカバーする両学科が連携して取り組み、互いに学び合える場になってほしいと思ったのです。

栄養教育実習の授業の中で学生に提案し、健康教室のプランニング、教材づくり、実践演習などを行って準備を進めてきました。ディスカッションを重ねるうちに、「いい教室

にしよう」、「この機会にしっかり力をつけたい」という意欲を持つ学生が多くなってきたように思います。

「おいでよ! 松大健康教室」の開催

健康教室のネーミングもみんなで検討し「おいでよ! 松大健康教室～食事と運動から、めざせ!健康な未来の自分～」としました。身体計測、3種類の食事診断、栄養相談コーナーのほかにも、子ども用のコーナーも設置し、運動指導は時間を決めて行うことにしました。今年は全面的に両学科の共同開催とすることはできませんでしたが、スポーツ健康学科の4年生2名が田邊愛子専



任講師の指導のもとに、日常生活で取り組みやすい運動を指導してくれました。

開催日は、夏休みに入って最初の日曜日である8月11日。課外のプログラムでしたが、前日の土曜日の準備にも多くの学生が集まり、当日もほとんどの学生が参加しました。健康栄養学科の藤岡由美子専任講師、水野尚子助手、大森恵美助手、大学院生の田内佑季さんのサポートをいただきながら、これまでの成果を活かして、各ブースの運営を行いました。新聞等を通じて、参加者募集の広報も行ったのですが、参加者は15名(男性4名、女性7名、子ども4名)と少なく、残念でした。しかし、「参加してとてもよかった」とおっしゃってくださった方の言葉、熱心に紙芝居を見てくれた子どもたちの様子などは、学生たちにとって何よりの励みになったと思います。

この実践の場で得たものを今後の学習に活かし、知識・スキルの習得だけではなく、実践力を磨いていってほしいと願っています。

これまでの経緯

人間健康学部健康栄養学科では、1期生が3年生になった年から、3年生前期科目である栄養教育実習において、地域の方々の協力のもと、栄養アセスメント実習を行ってきました。栄養アセスメントは管理栄養士養成大学であればどの大学でも扱う内容ですが、実際に地域の方を対象者として実施している大学は少ないと思います。その後、臨床栄養学実習と共同実習という形で実施し、それぞれの科目で習得した知識やスキルを実践的に学ぶ場として位置づいてきました。

本年度の実施に向けて

5期生が3年生になった今年は、スポーツ健康学科と共同で実施する健康教室としてグレードアップさせたいと考えました。健康づくりの3本柱「栄養・運動・休養」のうち栄

立科町女子スポーツ聖地化シンポジウム開催

去る8月26日、本学を始め、立科町、日本体育・スポーツ政策学会、同志社スポーツ政策フォーラムの共催で、女性アスリートの活躍の支援、立科地域の女子スポーツのメッカ化・当地域の活性化を目的としたシンポジウム(立科町)が開催されました。本学を含め同志社大学など4大学の学生・院生を始めとして、多数の町会議員や地元の方々など約70名の参加がありました。

基調講演では、地元町会議員の土屋春江氏や、巽 樹里氏(シドニーオリンピック、アテネオリンピック シンクロナイズドスイミングの銀メダリスト)から、熱意あふれる話や貴重な経験談を聞くことができました。引き続き、吉岡麻里子氏(女子7人制ラグビー日本

ユース代表ヘッドコーチ)、倉田知己氏(JTBグループ本社スポーツ事業推進室エグゼクティブプロデューサー)、根本賢一(本学人間健康学部スポーツ健康学科准教授)からそれぞれの分野について報告がありました。

最後に立科地域のスポーツによる活性化をテーマとして、学生・院生による発表(コンペ)を行いました。本学からは、スポーツ健康学科4年の近藤壮太君が「立科で合宿をしよう～準高地を生かした身体づくり～」を、立花千春さんが「健康いきいき教室～人と自然が輝く町～」を発表しました。いずれもよどみのない、これまでの活動を踏まえた地に着いた提案でした。夜の懇親会では、本学の研究発表について、巽氏を始め参加者からおほめの言葉を多数いただき

人間健康学部スポーツ健康学科長

吉田 勝光

ました。他大学の学生からは、本学ではどのような勉強をしているのか是非教えてほしい、といった熱い質問も寄せられました。

参加された人々に、小さな松本大学の「大きな『実力』」を感じ取っていただけたのではないのでしょうか。



地域に有為な人材の育成をめざして [高大連携事業]

「地域に有為な人材の育成」を理念として平成18年度から始まった高大連携事業は、「高校授業グレードアップ型連携」「大学授業チャレンジ型連携」「大学授業サポート型連携」という3つの基本事業を柱として実施しています。本年度の取り組みの一部をご紹介します。

高校生が大学の授業にチャレンジ

高大連携推進委員会委員長
松商短期大学部長 山添 昌彦

高校生がキャンパスライフを体験し、進学の動機づけに活用してもらう「チャレンジ型高大連携事業」を今年も開催しました。2006年の穂高商業高校との連携から始まったこの取り組みも今年で8年目。この間、新たに連携を結んだ松商学園高校、飯田OIDE長姫高校を加え、更には辰野高校からの参加もあり、今年は、高校2年生を中心に250名を超える参加がありました。参加者の増加から、昨年からは2回に分けての実施しており、今年は、7月16日

■7月29日～31日の時間割

	1時限 9:40～10:40	2時限 10:50～11:50	3時限 13:00～14:00	4時限 14:10～15:10
7月29日 167名	キャリアクイズ① 経営分析①	経営分析① キャリアクイズ①	経営学入門①	銀行論①
7月30日 175名	マーケティング① 銀行論②	銀行論② マーケティング①	パソコン演習① Excel経営分析① Excel経営分析① パソコン演習①	Excel経営分析① パソコン演習①
7月31日 188名	経営学入門② 地域活性化と経営戦略 ～競争と共生の視点から～	会計学入門① 商店街をどう元気にするか ～買物による地域活性化～	経済学入門① グループディスカッション ～高校生とまちづくり～	マーケティング②



～18日に松商学園高校商業科の生徒を、7月29日～31日に穂高商業高校、飯田OIDE長姫高校、辰野高校の生徒を受け入れました。この間、本学は通常講義期間中で高校生は講義から講義への教室移動、学生食堂の混み具合、先輩学生との触れ合いといった、ありのままの学生生活を体験することによって、進学後の自分の大学生活をそれぞれが具体的にイメージしていたようです。また引率の高校の先生との久しぶりの対面に歓喜する本学学生の姿も見受けられました。



高校生×短大生の混合チームによる文化祭当日のおにぎり作り

おにぎりプロジェクト in 穂高商業高校

松商短期大学部商学科
准教授 金子 能呼

穂高商業高校の文化祭で、3年4組のクラス企画に金子ゼミが参加し、協同体制でおにぎりを作ることになりました。まず、これまでゼミの学生が考案した100のレシピからベスト10を選んでいただき、一緒に試食をして作るおにぎりを絞りました。

文化祭当日は、高校生×短大生の混合チームで、正確に重さを量りながら、6種類のおにぎりを20個ずつ、慎重に作りました。大変な作業でしたが、高校生パワーを炸裂させてくださったので、楽しく完成させることができました。

おにぎりは高校生や保護者の方々にご試食いただきました。今回の活動を踏まえ、3年4組のみなさんは9月のイベントに

向けて、本格的におにぎりの商品開発に挑戦するそうです。おにぎり仲間として、金子ゼミも全力で応援したいと思います。

ゼミの学生は初めて教える立場になり、大奮闘！成長に繋がる貴重な経験になったようです。

学びの成果を活かした 高校生の合同販売会が大好評!!

総合経営学部観光ホスピタリティ学科長 白戸 洋

長野県商業教育研究会と本学が共催し、高校生自身が開発・アレンジした商品約90種類を販売する合同販売会「デパートゆにっと」が、ながの東急百貨店にて、8月19日から3日間の日程で開催されました。「デパートゆにっと」は、全県から集まった12校45名の高校生を対象に、本学が全面的に協力して、4月から5回にわたり開催した、商品開発やマーケティングなどを学ぶ「マーケティング塾」の成果を発表する場として開催されました。揃いのオレンジ色のエプロンを着け、元気な声で大勢の来場者に自分たちの商品をアピールしていました。地元の伝統野菜を活かした弁当やスイーツなど、地域の資源を活かした商品が特に好評で、3日間の売り上げは200万円を超え、高校生のひと夏の挑戦は大成功に終わりました。高校生「デパートゆにっと」は来年度も予定されています。地域の若者を育てることをミッションとして掲げている本学は、このような高大連携教育によって、さらに地域の未来を担う若者を育てていきたいと考えています。



寄稿

ホンモノの商いへの挑戦

デパートサミット実行委員会事務局
長野商業高校

坂口 健之

今回のデパートゆにっとのねらいは、①高校・大学・産業界との連携による協調学習を行うこと②失敗の起こり得る環境に直面して顧客満足の高いホンモノ志向の合同販売を行うこと、の2点が主なものであった。十分な検証がまだ済んでいない段階であるが、県内12校45名の生徒たちが松本大学様のご指導を頂きながら、これまでになかったマーケティング分野での連携と協調学習、および単独校では成しえない活動が実践できたことは大きな成果である。また生徒たちはお客様の視点に立ったながの東急百貨店様の姿勢、特に商品管理や質の高い接客サービスを体感し、守られた教育活動の中で実践している現状との乖離を痛感したことは大きな経験であった。今後は第2回目の開催に向け、より市場の求める商品やお客様の心に響く接客を目指し、ホンモノの商いに近づけるよう活動を展開していきたい。

魅力ある地域づくりへの 貢献をめざして、 新たに連携協定締結

本学は、「地域を生かす、人づくり大学」というスローガンのもと、地域貢献を大きな柱として、地元自治体や公的機関、教育機関、民間企業と連携協定を結び、特色を生かした様々な取り組みを行っています。このたび新たな連携協定を締結しましたので、ご紹介します。

電動アシスト四輪自転車の普及事業に関する連携協定を締結

—産官学三者による健康産業育成の取組— 人間健康学部長 等々力 賢治



去る8月7日、本学において、株式会社デリカ、松本市、本学の三者間で、「電動アシスト四輪自転車の普及事業に関する連携協定」の締結・調印式が執り行われました。

この事業は、高齢化に伴う筋力低下や下肢障害による歩行機能の低下で家の中に閉じこもりがちな方が、モーター付きの電動アシスト自転車を使用して戸外に出たり、買い物などにも積極的に出かけるなど活動範囲を拡大し、それに伴う生活の質的向上を図ろうとするものです。それが、ひいては活力ある地域社会の創造、形成に資す

るものであるのは多言を要しません。

具体的には、デリカが電動アシスト自転車を製作し、本学がその使用によるエネルギー消費などのデータ収集・分析を行い、松本市の主宰する健康産業育成協議会が両者をコーディネートし、データ収集・分析などに要する費用の一部を支援するというものです。まさに産官学三者による連携事業なのですが、さらに、「健康寿命延伸都市」を標榜する松本市が施策の目玉の一つと位置づける、健康産業の創造・育成支援の初めての取組であることも記しておきたいと思えます。

超高齢社会に突入した今日、人々の健康の維持・増進に関わって様々な需要が発生し、関連するビジネス・産業分野が新たに生まれてくるだろうことは想像に難くありません。とすれば、健康に関する研究・教育を推進する人間健康学部を擁し、地域の活性化に貢献することを設立理念とする本学



が、可能な形でそれに関与するのは当然であると言ってよいでしょう。その意味で、今回の取り組みは、松本市同様、本学にとっても先駆的な意義を持つものです。

最初は操作に戸惑う方もいるようですが、二輪に比べ安定性抜群の四輪自転車は、慣れてしまえば極めて安心な乗り物であるのは間違いありません。そして、モーター付きであるため、ペダルをこぐ際には適度な負荷がかかり下肢筋力の強化にも役立ちそうです。

そうしたことを明らかにすることを含め、今後も、購入・使用者を対象に使いやすさや有効性などについてモニター調査を行うなど、いっそう連携の実を上げるべく取り組む予定です。

旧新村駅舎保存について「新村駅舎を残す会」と協定締結

大学事務局長 小倉 宗彦



松本電鉄上高地線の新村駅には筑摩鉄道と言われた大正時代の洋風木造建築の駅舎が残っています。この木造駅舎は新村駅の建て替えにより取り壊される危機にあり、地元の有志が「新村駅を残す会」を組織し、保存の活動を続けています。

この駅舎について「残す会」と本学が連携・協力の協定を結び、ともに知恵を出し合いながら保存活動を進めていくことになりました。

協定書の調印は8月20日に本学において住吉廣行学長と「残す会」の浅川安治会長の間で行われ、その後記者会見が行われました。

駅舎の保存には様々な課題が残されており、地域の住民の関心を高めることがまず最初に取り組みなければならぬ課題です。松本大学ではこのたび採択された文部科学省の競争的補助金である大学COC事業の対象としても取り入れていく予定です。



学生と「残す会」の皆さんとの協働活動により、保存に対する気運の高まりが期待されます。

このような木造の駅舎は全国にも数少ないと言われており、鉄道ファンだけでなく、松本市の文化財として残れば観光スポットの一つとしても生きる可能性があります。

また、すでに古い駅舎の風景などを描いている方からの寄付の申し出もあり、もっと全国に情報発信をして駅舎の活用方法やイベントなど、工夫した活動の活発化が求められています。

進展するチェコ・パルドゥビツェ大学との連携

総合経営学部長・学芸員課程担当 木村 晴壽

チェコ共和国のパルドゥビツェ大学(以下パ大学)と松本大学は、7年前から相互協定にもとづく連携関係にあり、平成24年度には本学総合経営学部観光ホスピタリティ学科の学生が交換留学生として、世界遺産の街リトミシュルにあるパ大学の文化財修復学部に留学しました(詳しくは『蒼穹』110号を参照)。学生の留学に加え本年度7月には、パ大学文化財修復学部の若手教員2名が研修目的で来学し、2週間にわたり日本各地で様々な調査・研修に従事しました。パ大学からの教員派遣については、本学学生の留学時に筆者が同行していたことでもあり、国際交流委員会と相談のうえ、研修の中味等で条件が折り合えば受け入れようとの方針が早い段階で固まっていました。

問題は、両大学による連携協定のものでの研修のため、本学が受け入れるのは当然としても、古文書の保存・修復技術となると本学だけでは対応できないだろうということでした。そのため先方の意向を詳細

に聴き、学内の関係教員の協力も仰いで、奈良・京都・武生・美濃、そして本学での調査・研修プログラムを提示し、6月をはじめに本学とパ大学での合意に至りました。



7月15日に来日したのもつかの間、16日には本学関係者との懇談を済ませ早速、奈良の研修施設へ向かうという慌たじさでした。奈良の公共的期間での研修を終わらせ、次は京都の民間修復会社で調査・研修に従事し、民間ならではの独特の技術についてたっぷり知識を仕入れることになりました。これまでにない暑い夏となり、この頃にはかなり体力も消耗していたようですが、「またいつ来られるかわからないから」という気持ちで精力的に活動し

ていたのが印象的です。

京都から福井県の武生に移動し、ここでは和紙を使った墨流しの工房を訪ねての研修が始まりました。ヨーロッパでもマーブリングという似たような技法はあるのですが、やはり使う染料も異なるし、なにより和紙、それも墨流しに最適の和紙を漉いて使うところに日本独自の技術が満載されていたようです。

武生から美濃市を経て松本に戻ってからも、書道家のアトリエでの体験などを次々にこなし、2名は無事、8月31日に再び機上の人となりました。

本年度も総合経営学部観光ホスピタリティ学科の学生が9月下旬からパ大学へ留学します。今回は、以上のような経緯から、留学予定の学生が、先方の学部で教えを乞うことになる2名の教員と顔を合わせ松本を案内した事もあり、スムーズに留学生活に入れる状況を作ることができたように思います。

来年度も、違う顔ぶれのパ大学教員が本学を訪れるかもしれません。

37名の成長の夏:オーストラリア語学研修

人間健康学部
健康栄養学科 助手 百武 愛子



8月17日から30日にかけて実施された「オーストラリア国立ニューカッスル大学短期研修旅行」に、本年度は松本大学および松商短期大学部より8名の学生が参加をしました。湘北短期大学の29名の学生と合わせると、総勢37名の学生がこの2週間の研修旅行に臨んだこととなります。

研修は、午前中は大学内での英語研修、午後は様々なアクティビティーを通してのオーストラリア文化体験というプログラムでした。たくさんの初体験に学生たちは終始目を輝かせ、オーストラリアの文化を肌

で感じているようでした。

大学での研修プログラムと同様に重要な学びの場となったのが、ホストファミリーと過ごす時間です。自分の伝えたい

ことをうまく伝えることができず、また、ホストファミリーが伝えたいことを十分に理解することができず、もどかしさや悔しさを感じた学生も多かったようです。その悔しさ・もどかしさは、研修旅行に参加したからこそその感情であり、その中で自分なりに精一杯に英語を駆使することや、相手が言わんとすることを読み取ろうと必死に耳を傾けることは、学生たちにとって、語学力の向上のみならず、今後につながる大きな学びとなったのではないのでしょうか。

さらに、この研修旅行では自分自身を、

また日本を客観的に見つめなおす貴重な機会となっていたように思います。現地の高校を訪問した際に行われた、日本とオーストラリアの文化に関するクイズ大会では、「私、日本について知らないことばかりだ!」という声を多く耳にしました。



研修最終日には、学生一人一人に修了証書の授与が行われました。証書を受け取る学生の表情は研修初日とは明らかに異なるものであり、学生各々が、達成感と自分自身の成長に手ごたえを感じているようでした。

キャンパスを飛び出し
地域で学ぶ!

アウトキャンパス・スタディ

out campus study

トヨタ会館とトヨタの高岡工場で学んだ『トヨタ生産方式』

総合経営学部 総合経営学科
教授 葛西 和廣

7月8日、総合経営学科の葛西ゼミ・成ゼミを中心としたアウトキャンパス・スタディで、トヨタ自動車の高岡組立工場を訪問し、約1kmもの組立工場内を70分間かけて見学と説明を聞きました。トヨタ自動車は現在の従業員数(連結)は約33万3,500人、今年3月期(連結)で売上高22兆641億円の日本最大の企業です。今回訪問した高岡組立工場では主に、カローラ、iQ、オーリスを生産し、生産台数は年間179千台、従業員は約3,300人。大まかな工程はプレス⇒溶接⇒塗装⇒組み立てとなっており、車の部品は400、溶接箇所は4,000にも及ぶそうです。人とマシンが協働しており、機械の



力を利用しながら、塗装したボディに様々な部品を取り付け、組み付けが完了した車を最終検査工程で厳しくチェックし出荷しています。参加者達は、組立ラインを見学しながらガイドの説明に真剣に耳を傾けていました。また、トヨタ生産方式の説明を受け、大学の授業で学んだ「ジャストインタイム(just in time)」と「自動化」を生産現場

で確認することで理解を深めることができました。「効率的で、一切の無駄もないシステムだ」「従業員に優しいシステムだ」「従業員もロボットに見える」などと感想を漏らしていました。

次に、トヨタ自動車本社に隣接する「トヨタ会館」へ移動し、環境、安全、品質、企業の社会的責任などのコーナーを見学しました。「未来のクルマはどんなクルマ?」というコーナーで、「環境に優しいクルマ」「事故をおこさないクルマ」などの説明を聞いたり、「i-unit」の試乗体験を行いました。特に最新モデルの車が展示されているショールームでは、自由に試乗でき、みな大興奮していました。

帰りのバスの中で参加者たちは、「自分なりの参加目的は十分に達成した」「トヨタ自動車についてたくさん知ることができた」「大変有意義だった」「とにかく楽しかった」などの感想を話していました。



「多文化主義」-カナダ大使館を訪問して

松商短期大学部 経営情報学科
准教授 中村 純子

6月27日、中村ゼミ生29名は東京のカナダ大使館を訪問しました。中村ゼミは、2年生のゼミ生を中心に「多文化共生」というテーマを学んできました。カナダは多文化主義を標榜する国として知られているため、ぜひ大使館の方のお話を伺いたいと考えたのです。まず、事前学習として、2年生のゼミ生がカナダの地理、歴史、日本とカナダの関係、そして多文化主義の4分野について調査し、1年生のゼミ生にプレゼンテーションを行いました。そして、皆でカナダについての質問を考えました。

そうして準備して訪問したカナダ大使館



で、大使館の方にまず、多文化主義の洗礼を受けたのです。大使館の方がカナダについて講義をしながら、ゼミ生に質問をしたのですが、ゼミ生の反応が乏しいと、「あのね、日本人の最もいけないことは、自分の意見をはっきり言わないこと。ここは日本であっても、カナダなので、意見があったら、はっきり言ってください!」と毅然とした口調で言われたのです。その声に促され、2、3のゼミ生が最初は遠慮がちに、次第に自信を持って質問をし始めました。偶然にも私たちが訪問した日はカナダでは「多文化の日」という記念日でした。2年生のゼミ長がこう挨拶して締めくくりました。「私たちが訪問したこの日が、偶然にも多文化主義の日と伺い、これからも多文化共生について考えていきたいと思います。」

講義を受けた後も、図書館、庭など見学し、大使館の雰囲気味わわせて頂きまし



た。訪問後の学生の感想には「カナダでは同じクラスに出身国が違う子がいるのが普通で、色々な言語を母国語に持つことや、色々な宗教、行事でも当たり前のように受け入れています。日本の『普通』と違いすぎて、なかなか頭に入ってこないくらいカルチャーショックを受けました。」と記されていました。そうです!異文化を知ることは、自分の常識が通じない世界を知ること、他の価値観を知ることにつながるのです!学生達がアウトキャンパス・スタディで学んだことは大きかったようです。

被災地3年目の身近な紹介

「一つの地域を継続的に、地域のニーズに沿って、顔の見える支援を行うこと」をキーワードに実践している東日本大震災災害支援プロジェクトの活動も3年目を迎えました。最近の身近な活動と、現地の様子をご紹介します。

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト代表
総合経営学部 観光ホスピタリティ学科 教授

尻無浜 博幸



サマーキャンプと 子ども医療費助成制度

8月7日～9日の2泊3日で、今年で3回目となるサマーキャンプを実施しました。大街道小学校3年生以上の児童88名(その他保護者4名)を招待。浅間温泉にある3つの旅館を拠点に、さわやかな信州を学生と一緒に満喫しました。今年の夏は一段と暑さが厳しく、はしゃぎすぎて夜に熱をだす児童がいました。大事をとって病院で診察してもらいました。治療費を保険で手続きするつもりでしたが、石巻市には子ども医療費助成制度があり、制度的には小・中学生は3割を自己負担分として支払う必要がありますが、この自己負担分を助成するとのことでした。さらに10月1日から、通院分の助成対象を小学5年生までとしていたものを6年生まで拡大するとのこと。ちなみに同様な制度は全国的にあり、松本市も今年4月より、対象が小学3年生までだったものを対象拡大しています。熱を出した児童の親から数日後電話があり、「あまり大ごとにしな



さわやか信州を学生と一緒に満喫(梓水苑での川遊び)

い下さい、このことが原因で来年サマーキャンプが無くなると困ります。」とのことでした。電話を受け本当に困ったのは私たちでした。

■ 備蓄品整理と食堂

昨年に引き続き今年も、5月23日を皮切りに学習支援を行っています。前期は7回延べ35名の学生が、木曜日と金曜日の放課後に大街道小学校児童の学習支援をしました。



学習支援の時間だけでは触れ合う時間が少ないため、学生は児童と積極的に遊んでいる

また、学習支援活動の空き時間に備蓄品の整理も行いました。備蓄品とは、今回の大震災で全国から寄せられた救援物資が小学校内に多く蓄えられているもので、その整理が任されました。例えば発電機が何台、どこに保管されているのか、また使える飲料水の賞味期限と量など、小学校内にある全てのものを調べて一覧表にする作業でした。こういう作業をしていることは、大街道小学校区の地域の方にも伝えられていたらしく、校区内にある食堂で夕飯を食べていたら、店の主人が大学の者と分かる声をかけてくださり「松本大学の学生さんに小学校にある地域で活用できる救援

物資を今整理してもらっている」と。「その当事者は我々です」と。

■ 孫と運賃

小学校での学習支援活動から帰路に着くタクシーの運賃をまけてもらいました。その回数は1回だけではありません。運転手のお孫さんが学習支援に参加しており、お世話になっているからとのことでした。震災以来、息子夫婦と住むようになり孫の様子をよく知っている様子でした。孫の学校での出来事と本学の活動がよく結びついたらと学生は驚いていました。通常、小学校から石巻駅まで1100円です。このお祖父ちゃんタクシーなら1000円になります。

■ オリンピックと東北復活

東北復活にはスポーツの力が必要というIOC委員の判断から、2020年の東京オリンピック開催が決定したのではないかと考えます。2020年に復活の姿を世界に見せることが、日本人の使命になることでしょう。きっと目標は励みになると思います。

7年後を考えても今できることは、今やっている支援活動の継続だと改めて感じます。被災地の中でも、大街道小学校区というごくごく限られた被災地しか私たちは知りませんが、この地では深いつながりの重要性を学ばせてもらっています。本学ができることは限られていますが、今後も責任をもって活動していきたいと思えます。

学生の地域活動“福島っ子 聖高原キャンプ”

総合経営学部 総合経営学科 准教授 矢崎 久

8月2日から5日までの3泊4日の日程で、麻績村聖高原に福島県内に在住する小学生50名と保護者30名を招き、聖高原の澄んだ空気を吸って、放射能を気にせず戸外でのびのび遊ぶことをテーマとしたキャンプが開催され、総合経営学科でカウンセリングを学ぶ学生6名(1年生2名、2年生4名)とともに参加しました。3回を数えるこのキャンプは、麻績村の地域づくりを企画・実践するomimo、麻績村、守成クラブ郡山、松本大学の協働によるものです。

初日の午後2時過ぎ、一行を乗せた大型バス2台が到着、真新しい捕虫網や虫かごを手を下車してくる子どもたち。入村式を

終え待ちに待った自由時間が到来したものの、なぜかすぐに遊ぶとうしない子どもたち。保護者によれば、終わりの見えない危険から可能な限りわが子を遠ざけるのが親の責務と考え、子どもを戸外で一切遊ばせず、学校への送迎も窓を閉め切ったクルマでおこなう親も多く、“戸外で自由に遊ぶ”ことに戸惑っているからだろうとのことでした。

しかし、心配も束の間、学生たちのリードにより、セミを捕まえた、蝶々を捕まえた、などとはしゃぐ姿に安堵。飯岡美希さ

ん(2年)は、「子どもたちに出会い共に過ごせる側面だけを考えると気持ちがわくわくした。だが、ここに至る経緯を考えるとどう接したらよいのか、こころや振る舞いのあり方に悩んだ。でも、私たちのあたりまえの日常に感謝しつつ、ありのままに、身の丈で接すればよいのだと、このキャンプを通して学んだ」と語ってくれました。





話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』

地域づくり考房『ゆめ』専任講師 福島 明美

松本大学地域づくりコーディネーター養成講座開催

地域の問題・課題解決のためには、地域の資源(ヒト・モノ・コト・カネ)を掘り起こし、つなぐ役割を担う人材が今求められています。そこで本学では「地域づくりコーディネーター養成講座」を開講し、地域活動の実践者とともに、中立の立場で地域づくりを進める「地域づくりコーディネーター」を養成・認定しています。

この講座では、「知る」(共通基盤づくり)、「考える」(講義と演習)、「育む」(地域づくりコーディネート実践と振り返り)、「高める」(プレゼンテーション・グループワーク)という流れに沿ったプログラムにより、「連携」「協働」を視念に、約1年かけて必要な知識や素養を学び、地域活動をコーディネートできる人材を育成しています。

本学学生の地域活動は、ここでの認定者との「連携」「協働」により、よりスムーズなものに導かれています。持続可能な地域づくりに向け、若者が参画する市民社会の創出には、この地域づくりコーディネーターの存在は重要です。まさにこれは本学が目指す「生活必需品大学」として地域に貢献し、地域に役立つ「地域人教育」といえます。

平成24年12月1日から開講した第3期「地域づくりコーディネーター養成講座」は9月に開講し、10カ月におよぶ長期講座を社会人8名と学生4名が受講しました。学内外の審査員の評価による9月末の審査会において認定者が決定します。

今号では、本学学生が参加した認定者及び第3期受講者がコーディネートする地域活動を紹介します。

第3期受講者による学生との コーディネート実践

—松本BBS会—

BBS会は法務省、保護司などと連携して非行少年の立ち直りを支援するボランティア団体です。

Big Brothers & Sisters movementの略称であるBBS運動は、1947年に学生が始め全国に広がった運動で、兄・姉・ともだちのような立場で少年少女の気持ちを理解し、サポートすることを目的としています。

平成19年に、学生の参加を求め小松会長より相談があり、講義「社会活動」での地域活動の一環として、毎回1~3名の学生が参加してきました。講義終了後も継続する学生があり、自主活動として昨年学生プロジェクトを立ち上げました。



今年は5名の新生が自主的に参加し、在校生9名と卒業生3名が入会しています。「いろいろばた集会」「スポ

ーツ交流会」「クリスマス会」「社会参加活動」「ともだち活動」に加えて、昨年度、考房『ゆめ』に依頼のあった市内中学校生徒の学習支援活動も行っています。

第3期講座を受講した小松寿美代さんは、「活動を継続するための会員募集という直接的仕掛けではなく、コーディネーターとして、会員の意見に耳を傾けながらみんなの想いを企画・運営に反映させるよう心がけ、その過程で目的を見失わないようサポートしながら会員同士をつなげることに配慮しました。学生が役割を担うことで、自主性ややる気を高め、自分たちの活動という意識が強くなったと思う」と述べています。

認定コーディネーターによる 実践活動に学生が参加

① 若者参加のまちづくり拠点 『セジュール』



『セジュール』は、地域課題に絡めて、ひきこもりの若者の自立を支援し、若者とまちがともに育ち合うことを目的に、昨年9月に伊那市商店街にオープンしたコミュニティカフェです。これは、第2期認定者の戸枝智子さんが、養成講座を受講しながらコーディネートした事業で、学んだ知識やノウハウを現場で活かして展開しました。

『セジュール』とはフランス語で“居場所”

という意味で、喫茶スペースや展示ギャラリー、地域交流サロン、学習スペースがあります。

開設時から地元高校に通っていた学生が参加し、さらに前期には1年生もスタッフとして参加。ドーナツ作りや販売を、困難を有する子どもや若者達と一緒にを行いました。

② デイホーム楓

デイホーム楓を運営するNPO法人アルウィズは、社会貢献活動として、松本市の東昌寺と連携し、8月17日に地域を元気にするためのイベント「送り火の道化師」を実施しました。

地元住民60人余が訪れ、お寺の境内でミニサーカスやキャンドルナイトを楽しんだり、手づくりの豚汁等でのおもてなし、販売コーナーもありました。

楓利用者の送迎時に見つけた竹をいただいて作った手づくりキャンドルは、幻想的な空間を演出しました。

このイベントは、本学卒業生で認定者でもある、楓事務局長の小澤悠維さんがコーディネートし、学生6名がスタッフとして参加しました。学生は、買い出しや会場設営、食事作りや配膳などを行い、地域の方のおもてなしに一役買いました。



③ わおん♪自然体験隊2013

子どもたちが自然体験活動を継続して行うことにより、自然や環境に関心を持つきっかけとなり、生活に密着した深い体験となることを目的に、1年を通して行われています。これは、第2期認定者で、「持続可能な松本平創造カンパニーわおん♪」代表の山田勇さんがコーディネートしています。前期には、学生5名がスタッフとして参加。宿泊体験もあり、学生は社会人スタッフから対応の仕方などを学び、自然の中での子どもたちとの共同生活を通して、活動の必要性やスタッフとしての自覚と責任を学びました。



地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案などを行っています。最近の活動を紹介します。

管理栄養士スタッフ 石澤 美代子

地域の活性化をめざして！ 松本山雅 FC スタジアム「食」 14メニューが販売になりました！

松本山雅FCからの依頼を受け、スタジアム「アルウィン」で販売する飲食物（通称：スタめし）の提案を行う活動です。平成22年度から始めたこの活動も今回で4回目。健康栄養学科の学生有志40名が参加して4月から取り組み、6月にアルウィンで販売している飲食業者へメニューを提案した結果14メニューが採択されました。その後、メニューごとに飲食業者と打合せを重ね、学生の提案したものを商業ベースで製造や販売ができる商品に仕上げていきました。飲食業者の現場目線で、「作り方をこう変えたら大量で作る時に作りやすい」、「仕入れ単価の関係で希望の食材は使用できないけれど代わりにこの食材を使おう」等々、たくさんのご助言を頂きました。学生にとっても、現場の意見は貴重で、机上と実際の差異を学び、その課題を解決していくことが今回の活動の目的のひとつでもあります。



試作・試食を経て14メニューが商品となり、初販売日をホーム戦である8月11日（徳島ヴォルティス戦）と同18日（ジェフユナイテッド千葉戦）に分けて設定し、11日には11メニューが、18日には3メニューが販売のはこびになりました。

【学生の感想】

「最初はあまり売れなくて心配だったが、売りきれてよかった」
「2個目を買いに来て下さった方もいて、嬉しかった」

●8月11日初販売のメニュー

- ◇大葉のカオリのお好み焼き（焼きたて屋）
- ◇トン敵やまがつつ井（ホテルブエナビスタ）
- ◇山雅Winパン！（バーデンバーデン）
- ◇FLYス・ボール（とりKing）
- ◇安曇野ピリカラきゅうりパー（安曇野小町）
- ◇緑のワンハンドパンケーキ（中島屋降籾米穀）
- ◇山雅ラッキーWinソーダ（ほし☆スタ）
- ◇ワインSoulゼリー（あぐりたかやま）
- ◇米粉のもっちりクリームサンド（同）
- ◇山雅のおかずケーキ（同）
- ◇マシュモト☆白星ゼリー（同）

●8月18日初販売のメニュー

- ◇さびさび信州ポーク丼（ほし☆スタ）
- ◇ガンズくんのしっぽ（中島屋降籾米穀）
- ◇安曇野3トマトゼリー（安曇野小町）

多くのサポーターさん始めご来場者がお買い求め下さり、ほぼ全ての商品が完売しました。販売初日には提案した学生も店舗に立たせていただき、自分が考案し業者さんと共同でブラッシュアップしてきた商品が、消費者の手に渡っていく瞬間を目の当たりにしました。ここが商品開発やメニュー提案の醍醐味です。学生は、達成感を得つつも、自分のメニューと提案力に対する評価を受け止め、更なる学習への意欲をかきたてられていたようです。今回の活動は、関わった学生たちが今後管理栄養士として羽ばたく時の大きな財産になることと思います。

全面的にご協力いただいた飲食業者の皆様、活動フィールドをご提供くださった松本山雅FCの皆様、ご指導くださった本学石原三妃専任講師、成瀬祐子専任講師、その他ご尽力いただいた全ての皆様にご場を借りて感謝申し上げます。

また今回の特徴として、メニュー提案の有料化を試行しました。過去3回とも全て



無料で行いましたが、学生の提案が好評であり有料化の可能性が出てきたこと、有料化することで学生の責任感と達成感を育成しようとの意図によるものです。松本山雅FC、飲食業者ともにご理解をいただき、プレゼンテーション参加料として1業者1,000円、メニュー採択料として1品2,000円を出展業者にご負担いただきました。これは学生によるメニュー提案事業化への道しるべとなり、併せて深く感謝申し上げます。

阿南町で採れた食材を 阿南町で使えるものに！ 「加工食品提案活動」

地元で収穫したものを地元で消費する「地産地消」。さらに旬のものを旬の時期に食べる「旬産旬消」もできたら、との阿南町からの依頼を受け、阿南町で採れる「じゃがいも」や「にんにく」を使って加工食品を作るプロジェクトに取り組んでいます。メンバーは健康栄養学科の3年生有志5名です。少しでも地元で活用できる商品を提案したいと思い、町内給食施設に対してニーズ調査を行うことにしました。「じゃがいもならどのような加工品が使いやすいか」等をアンケート形式でお尋ねし、それを集計して作る加工食品を検討していきます。今回「にんにく」は残念ながら加工食品製造会社で扱えず、じゃがいもについてのみ試作や提案を行っていくことになりました。また、じゃがいもの生育状況や阿南町内給食施設等のことを理解してから提案したいと思い現地視察も行いました。長野県のほぼ南端に位置する阿南町は、松本市から距離があることもあり、初めて訪問する学生が多かったです。試作は今後信州大学工学部へ依頼し行っていくことになります。学外の様々な方との出会いの中で、学生は考え成長していきます。

阿南町の食材が阿南町で活かされるよう、多くの給食施設に受け入れられる加工食品を提案していきます。

学生が大学で学んだ事を地域の皆様へお返しできれば嬉しく思います。皆さまのお近くで、学生や管理栄養士がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください！

将来を担う子供たちに、 科学のおもしろさ、ものづくりの楽しさを…

本学では学びや研究の成果を社会へ還元する取り組みとして、将来を担う子どもたちへの体験型イベントを実施しています。これは参加する子どもたちだけでなく、協力する学生たちの学びの貴重な機会ともなっています。

第6回「ひらめき☆ときめきサイエンス」開催

大学院健康科学研究科・人間健康学部健康栄養学科 教授 山田 一哉

8月31日に、実験教室「自分の遺伝子型を調べてみよう～2013～」を開催しました。これは、研究機関で行っている最先端の研究成果に、小学校5年生から高校生までの子供たちが直に見たり、ふれることで科学のおもしろさを感じてもらおう独立行政法人日本学術振興会のプログラム「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一環で、6年連続の開催です。

内容は、唾液からDNAを調製し、「お酒に強いかわるか」「太りやすいかどうか」「短距

離型の筋肉か長距離型の筋肉か」などの体質を、対象遺伝子の一塩基多型から判別するというものです。当日は、高校生17名と引率者3名の計20名が参加。実験の合間に、「一塩基多型と体質」の講演を聴いてもらったり、実験室を紹介するラボ探検では、緑色蛍光タンパク質遺伝子を導入した培養細胞を蛍光顕微鏡で観察し、生きたままの細胞で外来遺伝子の働きを見るという体験もしてもらいました。プログラムの最後には、未来博士号の授与式を行い、集合写真を撮って解散しました。

高校生からは「DNAを自分で調製できてうれしかった」、「DNAって確かにひものように見える」、「遺伝子検査って面白い」という感想がありました。高等学校で全く実験をしたことがないという生徒、化学実験はよく行うが、生物系の実験は行ったことがないという



参加者がいる一方、ひらめき☆ときめきサイエンスの複数の実験教室を渡り歩いているという参加者もいました。実験サポートの学生たちも、予備実験の時の経験だけでなく、学生生活の経験が、このような多様な生徒への対応に活かされていました。

次年度以降も続けて多くの将来を担う子供たちに科学のおもしろさを体験してもらいたいと思っています。

山田一哉教授 「ひらめき☆ときめき サイエンス推進賞」を受賞



ここで紹介したプログラムを、継続的に実施し、将来を担う子供たちの科学する心を育み、知的好奇心の向上に大きく貢献した研究者を讃える日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」を、山田一哉教授が受賞しました。

松本広域ものづくりフェア2013 開催

管理課長 白井 健司

今年で通算14回目(本学会場は4回目)となる「松本広域ものづくりフェア」は晴天にも恵まれ1万4千名を超える来場者で賑わいをみせました。

「学びたい!体験したい!ものづくりの魅力」を親子で楽しもうという参加者のお目当ては28もの「ものづくり体験コーナー」。2日間とも早朝6時台から定員制の企画に行列ができました。

本学のキッズプログラミング教室(短期大学部矢野口ゼミ)が人気を集めたほか、第一体育館の産学連携ゾーン(総合経営

学科田中正敏ゼミ、小林ゼミ)ではパソコンでのお店経営と名刺づくりの体験に人が途切れませんでした。

また、ものづくりフェア初お目見えの「野菜マジック～3つ星シェフをめざそう(健康栄養学科廣田ゼミ3年生メンバー)」は、男子が多い体験企画とは好対照で女子の人気を集めました。ヒカリヤニシの田邊シェフの指導のもと、班ごとにコーチ役の学生がつき、シェフ姿の子供たちが・ナスソースのプランター・トマトのクリアスープ・信州サーモンのグリル赤ピーマンソース添えなどの本格料理に挑戦しました。

キッズプログラミング教室の運営を担当した矢野口ゼミの学生たちは「受講生の方々が熱心に取り組まれていたので、それに応えなくてはとプレッシャーだった」「今まで教えるという経験がなかったので、難しかったが良い経験になった」と



コメントを寄せています。

指導にあたった矢野口聡准教授は「学生たちはお互いにコミュニケーションを取りながら動けていました。計4回同じ内容の教室をやりましたが、回を重ねるごとに上手になっているのがよく分かり、たった2日間でも自信をもって人と接するようになったと感じました」と指南役の学生を評価しています。

このほか7号館1階において学生有志で取り組んだ「東日本大震災復興古本市(協力パリュブックス)」や健康栄養学科矢内ゼミが安曇野市商工会の協力で「安曇野ナポリタン」、「信州プレミアムそば」などの新メニューをフードコーナーで披露するなど、おもてなしでも本学らしさが光りました。

日本一のキャンパス見学会をめざして

— 好調な2013キャンパス見学会 —

入試広報室長 中村 文重

キャンパス見学会は、高校生や受験生、その保護者の皆さんに教職員や在学生との直接の触れ合いを通して、教育理念、学びの内容や研究分野、将来の進路、学生支援の内容、施設の様子などを知っていただき、今後の適切な進路選択や本学を受験する上での目的意識を醸成してもらう事を目的としています。これは入学してからのミスマッチを防ぐ事にもつながり、学生募集においては非常に重要な位置付けをしています。

今年度は6月を皮切りに10月まで計6回を計画し、既に5回終了しました。参加者数はのべ1,645人、対前年比108%と好調に推移しています。近年の傾向として、高校1、2年生の参加が増えており、早い時期からの進路についての意識の高まりがうかがえます。



マツナビ (M@tsu.navi) の活躍

本学のキャンパス見学会における最大の特徴は、部活でもサークルでも学生会組織でもない、入試広報室の支援部隊とも言える学生の自治組織マツナビの存在です。このマツナビは組織してから約8年が経過し、現在の登録者は約130名。希望者が増加した昨年からは登録にあたっての面接を実施しており、そこでの志望動機は「高校まで(今まで)の自分を变えたい」「コミュニケーションが取れるようになりたい」「キャンパス見学会に参加してマツナビの先輩に憧れて」というように、しっかりとした目的意識を持った学生が多くを占めています。

活動内容は、キャンパス見学会の運営に加え、高校生の学校見学、高校教員説明会



や保護者相談会などにおいての大学紹介や学内案内、受付係りとしても活躍しています。

キャンパス見学会ではリーダーを中心に、受付、誘導、ガイド、バス、学生ブース、体験講座といったユニットごとに、入試広報室と連携しながら2週間ほど前からの準備、当日の運営、片付けまでを責任もって行っています。さらに『日本一のキャンパス見学会をめざして!』をスローガンに、そのために必要な事を自分たちで考え、独自の研修会や、終了後2時間にも及び反省会を行い、スキルアップや改善しながらキャンパス見学会に臨んでいます。

こうした活動により、メンバーのコミュニケーション能力、マネジメント能力、そして、おもてなしの心は著しく成長し、目を見張るものがあります。まさに本学の特長である「実践教育」であり、ここで培ったヒューマンスキルは地域社会で必ず発揮できるものと確信しています。

本学の入試も8月のAO入試を皮切りにすでに始まっています。キャンパス見学会の成果が学生募集の良い結果に結びつくように、マツナビの協力を得ながら、活動の強化・充実に取り組んでいきます。

すべての学生の、個性や目標に応じた就職実現をめざして

— 前期就職支援の状況について —

キャリアセンター 課長 清水 康司

本学ではすべての学生が個性や目標に応じた就職を実現できるように、就職委員会、キャリアセンターが中心となり様々な就職サポートを行っています。



「合同企業説明会」は毎年就職活動年度の学生を対象とし、昨年の12月と今年2月、7月の計3回にわたり、本学の第一体育館で

実施しました。ご協力いただいた企業は計151社、参加学生は併せて約950名におよびます。「単独企業説明会」については、1月から企業ごとに本学の一般教室を会場として実施しており、9月末現在で計34社の企業にご協力をいただき、のべ420名あまりの学生が参加をしました。10月以降も企業からの要請もあり引き続き単独企業説明会の開催を予定しています。「就職」に向けた高い意識の育成、就職活動のための準備を目的とした「インターンシップ」ならびに「就職合宿(計3回)」については、いずれも大学部3年生を対象とし夏季休業期間を利用して実施し、インターンシップは14名、就

■前期の主な実施内容

日程	学問分野	対象
4月4日(木)	アセスメントテスト	新入生対象
6月1日(土)	保護者説明会	大学部3年生の保護者向け
7月12日(金)	学内合同企業説明会(54社)	大学部4年生、短大部2年生
7月24日(火)	県中小企業団体中央会主催合同企業説明会(13社)	大学部4年生、短大部2年生
7月27-28日	キャリアカウンセリング	短大部2年生
8月下旬~9月末	インターンシップ	大学部3年生
9月9-10日	就職合宿①	人間健康学部3年生
9月12-13日	就職合宿②	総合経営学部3年生
9月17-18日	就職合宿③	総合経営・人間健康学部3年生
1月~9月末	単独企業説明会(34社)	大学部4年生、短大部2年生

※上記の他に大学部3年生・短大部2年生を対象とした就職支援系講義の開講(全15回)

就職合宿は134名が参加をしました。

ここ数年、求人数が大学部・短大部ともに増加していることもあり、卒業時の内定率は90%を超える結果となっています。就職活動年度の学生は卒業まで半年あまりとなりましたが、未内定者の今後の頑張り期待します。

また、就職活動を控えた大学部3年生・短大部1年生は、意中の企業から内定を貰えるように、12月1日の企業訪問解禁に向け万全の準備を進めてもらいたいと思います。

廣田直子教授、平成25年度栄養関係功労者 厚生労働大臣表彰を受賞



人間健康学部健康栄養学科学科長の廣田直子教授が、9月11日に神戸市で開催された平成25年度全国栄養改善大会において、平成25年度栄養関係功労者厚生労働大臣表彰を受賞しました。

廣田教授は、前任校の長野県短期大学で30年余にわたり1400名を超える栄養士免許取得者を輩

出、平成18年10月からは本学教授として、県下初の管理栄養士養成施設となる人間健康学部健康栄養学科学科の設置準備に携わり、本学でも200余名の管理栄養士・栄養士を育成。現在は、健康栄養学科学科長として学科を統括し、教育と管理栄養士育成体制の充実などに尽力しています。

こうした教育や研究、栄養教諭のサポートや地域の食育推進など、多方面での多くの実績が評価され、今回の受賞に至りました。

「サイバーボランティア」委託

インターネット上の違法行為を監視する民間の「サイバーボランティア」に、本学の学生4人と教職員4人が県警より委託されました。インターネットは便利な点も多い反面、その匿名性を悪用した違法な情報も数多く氾濫しています。そのよう



なサイバー空間で、違法情報を県警に通報する浄化活動とサイバー犯罪被害防止や規範意識の向上を目的とした広報啓発活動が「サイバーボランティア」の活動内容です。今回、委託された学生は、情報センターで学生スタッフとして活躍している総合経営学部の加藤優騎さん(3年)・竹下友彬さん(2年)・林大輔さん(2年)・海老原佑輔さん(1年)の4名です。今後、パトロール活動や広報活動をできる範囲で行うことで、適切なインターネットの利用の向上に協力できればと考えています。(情報センター運営委員長 浜崎 央)

FD・SD研修会「学校生活とメンタルヘルス」を開催

8月30日、「学校生活とメンタルヘルス」と題して、FD・SD研修会を開催しました。始めに本学カウンセラーで臨床心理士の小田切なみ先生より、統合失調症について講演を頂きました。統合失調症の発症世代は10代から30代で、大学進学などで親元から離れたことをきっかけに発症する場合も多く、本学の学生も例外ではありません。かつては精神分裂病といわれたこの病のことを正しく理解すること、そして早期に発見し、介入する(治療を含む)ことで、社会生活の適応は可能になることを強調されました。

次に本学健康安全センター保健師



の脇本澄子先生に、本学における事例紹介をして頂きました。実際に相談に訪れた学生の来室経路、大学生活に支障が出た具体的な例、幻覚や妄想等の精神症状、その後の対応といった事例がいくつか紹介されました。今回の研修会を通して、精神疾患の病態が浮き彫りにされ、その深刻さを改めて感じる事ができました。

(FD・SD委員長 高木勝広)

一面のひまわりとひまわり祭りに大勢の見物

7月末から8月上旬、本学に隣接する畑に一面のひまわりが咲き誇りました。太陽の光を浴びた背丈ほどの金色のひまわりは、北アルプスと青い空を背景に、日々様々な表情を見せます。学生は試験期間中ということもあり、心穏やかなことではなかったでしょう。8月3・4日には「ひまわり祭り」で農作物販売や保育園児の美術展等も開催し、畑は常に多くの人で賑わいました。

これは5年前からJA松本ハイランド新村青年部の方々と行う「新村ひまわりプロジェクト」です。作付は農家が、PRは本学観光ホスピタリティ

学科の学生が有志でチームを組み、新村を元気にする取り組みです。保育園、公民館、(株)アルピコ交通等との連携は学生が計画し、自ら出向き、進めました。大輪のひまわりはさることながら、充実した学生の顔も輝いていました。

(観光ホスピタリティ学科
専任講師 中澤朋代)



「アスリートおにぎり」を開発

大学院健康科学研究科の呉研究室(スポーツ栄養)が、NPO法人ジョイフル(信州スカイパーク松本平広域公園陸上競技場内併設「喫茶CAFÉ JOYFUL(カフェジョイフル)」)、信州スカイパーク指定管理者TOYBOXと、「アスリートおにぎり」を共同開発しました。これは、大中規模の陸上競技大会が開催される信州スカイパーク陸上競技場で、アスリートにより良いパフォーマンスをしてもらうために、スポーツ栄養学に基づき「食の栄養面」でサポートすることを目的とした共同開発事業です。

おにぎりは、「うめひじきおにぎり」「肉巻きおにぎり」「枝豆チーズおにぎり」がセットになっており、アスリート達に摂ってほしい栄養素がバランスよく入っているのが最大の特徴です。競技場で大きな大会が開催されるなどに、喫茶CAFÉ JOYFUL(カフェジョイフル)で販売しています。(大学院健康科学研究科准教授 呉 泰雄)



本学学生がソロプチミスト女子学生奨学金の 中部ブロック代表に選出

本学大学院健康科学研究科2年の山田昌さんが、ソロプチミスト女子学生奨学金の中部ブロック代表に選出され、6月25日に国際ソロプチミスト松本からクラブ賞が贈呈されました。国際ソロプチミストは、管理職、専門職についている女性の世界的組織で、人権と女性の地位を高める奉仕活動をしています。この奨学金は、国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョンが設置する支援プログラムで、将来社会に貢献する人材の育成を目的に、学業・人材ともに優秀で修士、博士学位取得を目指して

いる女子大学院生、もしくは学業・人材ともに優秀であり学費の支弁が困難な女子大学生に援助されるものです。

本学大学院では初めての快挙で、山田さんにはこれを機にさらに研究に没頭してほしいと願います。(大学院健康科学研究科准教授 呉 泰雄)



インカレ報告

ラート競技部

第9回全日本学生ラート競技選手権大会
団体全チームが

10位以内に入る大健闘

主幹校として全員力で大会を成功裏に終える

ラート競技顧問 犬飼 己紀子

創部3年目の本学ラート競技部が、第9回全日本学生ラート競技選手権大会開催の主幹校を任されることとなりました。予定していた当番校の都合で、急きょバトンを渡された大抜擢でありました。

ドイツ語で「輪」の意味を持つ「ラート」は勿論ドイツ発生のスポーツ、2連の輪でできた器具を使い様々な運動を組み合わせて競技する、目に新しいスポーツです。競技人口が全国で300人強と言われており、日本においてはまだ創始記にあるスポーツと言って良いでしょう。演技そのものは個人種目ですが、補助者、見守り要員が欠かせないチームスポーツです。

松本大学ラート競技部には、現在15名の部員が所属しています。入部当初は、全員がラートと聞くのも見るのも初めて、高校までのスポーツ体験は「バレーボール・陸上競技・テニス・ソフトボール・器械体操」と様々ですが、月1回指導いただいている森



更紗コーチ(外部コーチ)のクリエイティブで華麗な演技の一つでも近づこうと日々練習を積んできました。全身を使い重心移動だけで空間に動きの構成をしていく緊張感ある楽しさが、彼らを虜にしています。

そんななか開催した「第9回全日本学生ラート競技選手権大会」。参加7大学中、最多の団体4チームを編成し、全チームが10位以内に入るという大検討を成し遂げました。特筆すべきは、ミスにめげず、規定の演技を最後までやり通した入部3カ月の短大生選手。会場からの声援と温かな拍手は彼女の胸にどう響いたでしょうか。今年7月、世界選手権大会でチャンピオンに輝いたOB審判員からも、「自身が大学1年の時、初めて出場した試合のことを思い出した。」とコメントをいただきました。

もう一点、大会運営を任された実行委員15名が、多くの葛藤・不安・緊張を乗り越えながら全員力で大会を成功裏に終わらせることができたことです。1年生から4年生部員までそれぞれの立場で経験を振り返り、伝えあった最終ミーティングでは、一人ひとり成長の兆しを感じることができました。

大会成績

◇団体戦

- 第3位 松本大学C
- 第4位 松本大学A
- 第7位 松本大学B
- 第10位 松本大学D



◇個人成績

上位3位入賞者・新人賞

- 男子個人総合3位 林 佑季 (スポーツ健康学科3年)
- 男子直転 3位 林 佑季
- 女子跳躍 2位 月岡 美穂 (スポーツ健康学科1年)
- 男子跳躍 3位 林 佑季
- 男子 新人賞 大島 暢 (スポーツ健康学科1年)

※体操競技経験者が上位を占めました。
※全員が『直転』『斜転』『跳躍』3種目に挑戦しました。(1名捻挫で跳躍のみ危険)
※ここに表記されていない、初心者学生の頑張りによりエールをお送りください。

全日本大学選手権大会 (インカレ) 参加結果

◇全日本大学ソフトボール選手権大会

■ 女子ソフトボール部

(9月6日～9日/大阪府大阪市・交野市)
VS 福岡大学(九州) 0-10 1回戦敗退

◇全日本大学学生陸上競技選手権大会

■ 陸上競技部

(9月6日～8日/東京・国立競技場)
・富井 博輝 (観光ホスピタリティ学科4年)
男子ハンマー投 52m31 予選敗退
・立花 千春 (スポーツ健康学科4年)
女子100m障害 15秒74 予選敗退
・瀧澤 祐未 (スポーツ健康学科2年)
女子200m 左大腿部肉離れのため欠場

◇東日本学生ハンドボール選手権大会

■ 男子ハンドボール部

(8月8日～10日/北海道・札幌市)
VS 桐蔭横浜大学 18-42
VS 富士大学 12-42
VS 北海道大学 21-39

以上の結果、予選リーグ敗退

◇全日本大学軟式野球選手権大会

■ 軟式野球部

(8月10日～14日/長野オリンピックスタジアム)
VS 八戸学院大学(奥羽地区代表) 2-9
1回戦敗退

全国私立短期大学体育大会・ 長野県私立短期大学体育大会に参加

第48回全国短期大学体育大会が8月5日～8日まで東京都内他で開催され、全国78短期大学、学生1,986名が参加しました。本学からは、女子バレーボール、男女バスケットボール、女子バドミントン、男女卓球が出場。特に卓球は、女子団体3位、女子ダブルス3位の好成績を収めました。猛暑の中でしたが、参加した選手は孤軍奮闘しました。

また、県内8短期大学(参加チーム29・参加学生293名)による第19回長野県私立短期大学体育大会が9月14日に開催され、伊那市を会場に熱戦が繰り広げられました。バレーボール、バスケットボール、バドミントンの3種目が男女別で行われ、本学は好成績を収めました。



■ 第48回全国私立短期大学体育大会結果

- ・女子バレーボール Bブロック決勝トーナメント ベスト16
- ・男子バスケットボール Bブロックベスト8
- ・女子バスケットボール Bブロックベスト16
- ・女子バドミントン 団体1回戦敗退
- ・男女卓球団体女子第3位 女子ダブルス第3位
- 男子シングル 予選リーグ敗退
- 女子シングル 1回戦・2回戦敗退

■ 第19回長野県私立短期大学体育大会結果

- ・女子バレーボール 優勝(2年連続)
- ・男子バスケットボール 3位
- ・女子バスケットボール 準優勝
- ・女子バドミントン団体 準優勝

卒業生の藤澤亨明さん、 埼玉西武ライオンズの 支配下選手に登録

総合経営学部観光ホスピタリティ学科を2012年3月に卒業した藤澤亨明さんが、埼玉西武ライオンズの支配下選手として登録されました。自慢の強肩を活かして、1軍での活躍を期待します。



©SEIBU Lions

語先後礼

人間健康学部スポーツ健康学科 教授 犬飼 己紀子

都内の某小学校の運動会でのこと、指揮台上がった校長先生に向かい子どもたちが見せた所作に、観客席からどよめきが起こった。

整列した全校児童の「おはようございます」との声に続き頭を垂れ「礼」をする姿に、保護者席から起こった反応だ。年度当初から全校挙げて実践してきた挨拶運動のひとつ「ゴセンゴレイ」。「おはようございます」の挨拶一言で、周りの人を感動させることができる。先生に教えられて実行してきたことの意味や価値を、子どもたちが実感して学んだ瞬間だ。

人を感動させる挨拶の体験。私のそれ

は少し前の話になる。世界百数十カ国を自転車で巡る旅を終え帰国した青年に講演をお願いした時のこと。出発前の思入れに始まり、旅の途中で出会った困難、人々から受けた幾多の恩恵など、彼の体験談に感銘を受けたのは勿論だったが、今も記憶に残る感動体験とは、講演後彼と交わした挨拶にある。控室に案内してひとしきりこちらの関心のままに談話した後の別れ際、私は講演いただいた感謝の意を伝え、頭を下げ体を起こした。すると目の前の彼はまだ体を折っている。あわてた私は再び「レイッ!」。上目づかいに彼を確認し「ありがとうございますまし

た」の言葉を添えた。周りから見て笑える姿だったろうが、『そんなことより』である。時間にしてほんの5秒ほどの時間だったと思う。人に出会って向き合う「一期一会」の姿勢とその価値を、旅の体験で学んだ青年の本物の挨拶であることを深く胸に刻んだ感動体験となった。

このほかにも、私には大切にしたい心に残る感動の挨拶がある。思えばいづれも人からいただいた挨拶であることに気づく、少し恥ずかしい話なのだが。いつかは、自分から発する挨拶で人を感動させる、そんな所作を身につけていきたいものである。

「語先後礼」・「一挨拶」挨拶は人間関係構築の第一歩、コミュニケーションの質を自ら発信する挨拶に乗せて磨いていきたい。

Information

第47回松本大学大学祭『梓乃森祭』

● 一般公開

10月19日(土) 10:00~16:00(一部17:00まで)

10月20日(日) 9:30~15:00

● テーマ NEXT ~New×Thanks~

■ 特別講演会「競技スポーツと人の可能性について」

中京大学名誉教授 室伏重信氏(予約不要・入場無料)

10月19日 13:00~

■ MATSUCOLLE(松コレ)

松本理容美容専門学校生とのコラボによるファッションショー

10月19日 16:00~

■ 地域貢献大賞選考会

松本大生の地域貢献の取り組みを12団体が競います。

10月20日 10:30~

■ 書道パフォーマンス

松本蟻ヶ崎高校書道部による書道パフォーマンスです。

10月19日 15:00~

※その他 ゼミ発表、各種イベント、模擬店など多彩な催しで皆さまのお越しをお待ちしています。



真面目に楽しみ、真面目に学ぶ

『まつもとシニアカレッジ』

シニア世代の持つ疑問や不安に応えたり、シニアライフをもっと楽しむための講座や講演会、体験イベントを中心としたイベントを開催します。仕事も、趣味も、健康も充実したシニアライフのために、ぜひご参加ください。

● 開催日時 11月3日(日)・4日(祝)

各日 10:30~15:30

● 会場 松本大学

● 主催 まつもとシニアカレッジ実行委員会

<構成団体：松本大学・abn 長野朝日放送・(株)市民タイムス>

● 後援 松本市・松本市教育委員会・松本市医師会・(予定) 松本市歯科医師会 等

※詳細については10月中旬から市民タイムスなどに掲載予定です。

編集後記

人間は感情(こころ)を持つ生き物です。敵が多いほど立ち向かう気持ちは燃え上がります。しかし平穏な日々が続くといつしか日常の忙しさに流され、新しく何かを始めようとか、衝突しても改革をしようという気持ちが薄れてしまうものです。まさに人の弱さです。今、本学を取り巻く環境は好ましいものだけではありません。こんな時こそ初心に返る事が必要ではないでしょうか。私自身、入職当時の気持ち(こころ)を思い起こし、今何が必要か、何をすべきかをもう一度考え、見極めて実行していきたいと思えます。

(記・入試広報室長 中村文重)



〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200 FAX 0263-48-7290
http://www.matsumoto-u.ac.jp/